

特訓からの帰り道、雄二は「俺さあ、思うんだけど、慎先生って俺たちのこと過小評価してない？」と淳に話す。

「え？ 別にそんなことはないと思うけど……」

淳のせりふに、雄二は不満そうに「えー、そうかあ。だって俺たち、かなり強いぜ」といった。

「えっと、雄二。このあいだは自分たちは弱いつて落ち込んでなかったっけ？」

「まあ、たしかにそうだよ。でもよくよく考えたら、俺たちかなり強い力を持ってるんじゃないかって気づいたわけよ」

「かなり強い力？」

「ああ。だってこれ、超能力だぜ。こんなの持ってるだけでも相当だったのに、俺たちってばかなり特訓して、白藤の配下の四天王のうち、二人も倒しちゃったんだぜ。もう、俺たちが本気出せば、軍隊でもぶっ倒せちゃうぜ。うまくいきや、国だって取れるぜ」

この雄二の言葉に淳は顔をしかめ、「確かにそうだね。気持ちは分かるよ。でも、僕はそういう考えは嫌いだな」とつ

ぶやいた。

「えー、どうしてさあ」

「それじゃあ、江田さんと同じ考え方になっちゃうもん」

雄二はその言葉にはっとし、「あ、ごめん」と謝った。

「い、いや、雄二の言うことが間違ってるっていつてるわけじゃあないよ。僕だってこの力はすごいと思う。それに男として強さにあこがれる気持ちも分かる。でも、だからって力を振りかざしたりするのは、間違ってると思うんだ」

「ま、そうだな」

「このあいだ、慎先生がいったじゃない？ 能力を持つてる人は、人に知られたらみんな離れていくって。あれは自分とは違う何かを持っているからなんだと思う。そして、その力が普通の人にとって、自分には理解も対処もできないからだとも思うんだ。だから、能力者ってのは能力を隠さないといけない。少なくともその力を誇示するのは絶対にだめだと思っただ。もしそんなことしたら、能力を認めてくれる人ですら、離れちゃう。だから、能力を使って人を助けるならいいけど、能力で人を傷つけるのは絶対にだめだと思っただ。」

うーん、僕が言いたかったこととなんかすこしずれてるよう
なきがするけど、伝わったかな？」

「ああ、十分だよ、淳。そうだな。俺が間違ってた。たしか
にこの力はすごいし、俺たちは結構この力を引き出せてきて
いるのかもしれない。でもだからって、強さを求めすぎたり、
振りかざしたりするのは間違ってるもんな。この力は大事な
ものを守るために使わないとな」

「うん。そうだね、そうだよ。僕もそう思う」

「よし、そうと決まれば家に帰って寝るか」

「え？ いきなりどうして？」

「決まってるんだろ。明日の特訓は今日よりもきつくなるんだ。
だったら体力つけなくちゃな」

「そっか。そうだね。でもしっかり夜ご飯も食べないと体力
落ちちゃうよ」

「あ、そっか。そりやそうだ」

そして二人は向き合い、笑い始めるのだった。

淳たちと別れた後、赤羽は鳴り始めた携帯電話を取り出し、通話ボタンを押す。

「もしもし、赤羽です。ああ、お前か。どうした、こんな時間には？」

電話の主は情報屋を営んでいる彼の友人であった。友人といっても、慎が以前助けたことのある人物で、彼から見れば慎はかなりの恩人であるのだが。彼は今ではかなり優秀な情報屋で、その彼がいま、かなり深刻な雰囲気話しかけてきたので、慎はいつものようにふざけて彼と話すのを今回は自重した。

『もしもし、慎さん？ 実は言いくいんだけど、……』

「ああ、どうした？」

『貴方が狙われているらしいんだ』

「ん？ 俺がか？ 淳と雄二じゃなくて？ 第一、らしいってことは、まだその可能性は一〇〇ではないのか？」

『ごめん、言い直すよ。君は狙われている。それもかなりのやつに』

「かなりのやつ？」

「中国五強って知っているかい？ そのうちの一人、斬虎と呼ばれる男だ」

「斬虎？ なんだそりゃ。刀でも使うのか？」

『刀って言うか、仕込みらしい。僕も詳しくは知らないんだけど』

「へえ、お前でも知らないのか」

『うん、そうなんだ。というか、これは言い訳じゃあないんだけど、中国五強ってよく聞く割には露出がものすごい少ないんだ。だから他の能力者についてもよく分かってない』

「まあ、俺はその中国5きよーなんてのも聞いたことがないんだけどな」

『ともかく、気をつけて。中国五強は中国トップの実力者たちだ。その一人たる、斬虎。それが貴方を狙っているんだから』

「分かった。有益な情報をありがとう」

『ふふ、安くしておくよ』

「げ、マジかよ」

慎は軽く笑い、別れを言って電話を切る。そしてゆっくり

と空を見上げるのだった。